

第十五回 「公德文芸賞」の入賞者と作品および選評

【俳句部門】

▽最優秀賞

汗という私流して登校す

尚綱3年 柏田 怜奈

【評】「汗」を「私」の分身だと直感し表現したところが、若々しく大胆だ。「登校す」も的確で、日々汗して生きる姿が十分に表現されている。「という」はややもすれば理屈っぽくなるが、「汗」という身体性で、これを超えた。感覚も詠み方も、新鮮。(岩岡)

▽優秀賞

夏の雨土よりテロの匂いする

熊本信愛女学院3年 平嶋 遥歌

【評】「テロ」という政治的事件を詠んだ新しい句。テロの血なまぐさを、激しい夏の雨と「土の匂い」でとらえた感覚が鋭い。全身で詠んだ直感の句である。(岩岡)

消してなほ黒板に和歌みなみ風

熊本3年 菊川 和奏

【評】いかにも「みなみ風」(南風Ⅱはえ)らしく、若い。「消して」「なほ」黒板に残る和歌の残像に、若者らしい詩情が漂う。美しく完成度の高い句である。(岩岡)

桃剥いて初恋のことばを知らず

熊本信愛女学院3年 高田 侑奈

【評】「桃」と「初恋」のとりあわせの詩情であって、「ことばを知らず」で終る余情も深い。やや甘いのが、それに徹した物語性もある。(岩岡)

アスファルト小さく濡らす僕の汗

第二1年 江口 優

【評】一滴の汗をクロージアップした、とても印象的な写生句。「小さく濡」れた汗に、自分の存在を見た発見が、的確で若々しい。(岩岡)

憧れの父の背中は入道雲

御船2年 大垣 巧実

【評】子は親の背中を見て育つというが、この句は父への敬意にあふれた句。「入道雲」の比喻が的確で、あたたかい父子の情が十分に伝わってくる。(岩岡)

▽入選

栗食べて人にやさしくなれそう

尚綱3年 小田 愛莉

平成の最後の夏を寝て過ごす

熊本工業2年 奥村 倭大

おい青しひまわり達に見おろされ

盲学校1年 吉岡 夏輝

何気ない日常が好き天高し

尚綱3年 上田 朋花

夏雲が僕の未来を運び来る

水前寺高等学園3年 村上 進太郎

▽努力賞

夕暮れが赤き江津湖を抱いていく

熊本学園大学付属2年 上村 快斗

我が命尽きると知ってか夜の蝉

文徳1年 村上 琴音

十六の夏平成最後に思い馳せ

御船2年 山本 菜生

墓参りいつも楽しみ小袖餅

第二1年 原 謙臣

笑い声波紋のように秋麗ら

尚綱3年 上土井 愛

夏風が一步進めと背中押す

城北1年 檜木 美有

青空のそこにたたずむ僕の友

球磨工業1年 蔵谷 健人

Tシャツのしみこむ汗と日のかおり

第二1年 中嶋 蓮実

炎天下ピッチに響くホイッスル

城北2年 前田 将太郎

花火散る夏の終わりを告げる音

文徳1年 本田 彩夏

【総評】本年度も前年にまして応募作品が増えたのは嬉しい。だが、それが〈質の向上〉となっていないのはさびしかった。なにしろ詠まれている題材が例年どおり、ごく身のま

わりの、夏休みの宿題や部活のこと、蟬や蛍や兜虫のこと、また祭に浴衣に花火、そして恋のことなどが大半で、新鮮なものが少なかった。高校生の作品だから、それは仕方ないにしても、捉え方があまりに軽くて甘く、ただことばを五七五に並べたという程度のもが多かった。

そこで選句に当たっては、取り組みに真剣な姿勢があるか、どこかに他と違う視点があるかを評価規準として選考した。

よって入選した作品には、そうした真摯な姿勢や新たな素材の拡充があり、表現にもそれなりの工夫がある。これらを参考にして、短いことばで自然を写し、人生や社会を捉える俳句という文芸と、これからも真剣に、そして楽しく、向き合ってほしいと願うものである。(星永)

【短歌部門】

▽最優秀賞

戦争をあまり語らぬ祖母を見て語れぬという恐さに気付く

熊本信愛女学院3年 平嶋 遥歌

【評】戦争を知る世代が少なくなり、大変な時代があつたと声高に語る人を見かけなくなった平成の今、戦禍の激動の昭和を生きてきた祖母の内面を思いやる作者の、人間愛の共感の感性に感動します。それはまた、限らない信頼を大人に覚醒させてくれるからです。(塚本)

▽優秀賞

方程式僕はX君はY二人いないと完成しない

熊本マリスト学園1年 浅山 海斗

【評】まさに高校生らしい率直で爽やかな作品である。君が異性ならば、「恋」が、同性ならば友情が成立する。やはり恋の歌と見るべきだろう。(橋元)

青春は尊いなんて誰が決めたメロンソーダにアイスは溶けて

熊本3年 菊川 和奏

【評】へ和奏◇は多分「わかな」と詠むのだろう。女生徒の作品だが、突っ張っていて面白い。上の句で疑問を投げかけ、下の句をさらりと流してユーモアを誘う。(橋元)

雨のない乾いた空の夕暮れに音だけ響く稲妻ひとつ

文徳2年 泉 翔太

【評】言葉選びが的確で韻律も良く、格調たかくうたわれています。しかも平明で端正な、そのさりげない自然描写が実感を伴った感応力を感じさせます。感情の移入と抑制のバランス感覚の良さが窺えます。(塚本)

夏の日に黄色い迷路にたどりつき私は一人ひまわりの中

尚綱3年 榊田 菜月

【評】若者は自分が思っている以上に夢と幻想の中にいるものです。大人への途上の「迷路」の位置の今、太陽に向かう「ひまわり」のようでありたいという熱い思いが素直に表現されています。(塚本)

子の時は母に甘えて青年は父の背中に憧れを抱く

城北3年 原口 泰成

【評】幼いときは母親が好きだが、成長するにつれて父親を尊敬するようになる。作者の体験を詠んだのだろう。「子の時は」を「幼日は」に。(橋元)

▽入選

受験生踏んでも蹴つてもついてきて今日も明日も制服を着る

第一3年 元田 紀代香

気づいたらいつの間にか笑ってる友と私の化学反応

第二1年 下田 美菜

離れても僕の思いは変わらない君のところへ伸びろベクトル

濟々巒3年 山下 拓真

楽しみは台風情報出た時に休みの連らく待っている時

熊本学園大学付属1年 濱砂 幸士

夕立ちの降りしあの日のアスファルト焦げたにおいがなつかしきかな

球磨工業1年 松本 陸弥

▽努力賞

生まれたようちの末っ子生まれたようちの兄弟これで十人

菊池女子1年 西本 由香

風が吹き緑が散って紅が咲く色移りゆく秋の訪れ

湧心館定時制2年 橋本 龍樹

あの場所であなたと出会ったあの時は私の心が動いたあの日

阿蘇中央2年 寺澤 侑希

毎朝の目覚まし時計は波の音カーテン開けると夏の始まり

芦北高校2年 濱田 大禅

母の味離れて気づくありがたみいつかは返す感謝の気持ち

八代清流2年 上田 伸太郎

【総評】応募人数が昨年よりもぐんと増えたことを先ずよろこんでいます。作品数も大きく増加しました。そのぶん、眼に留まった作品が数多くありました。

しかし、その一方、一気呵成に作品化した、自己を客観化していない作品が目立ったこととは不満です。もう少し、時間を溜めて“作品化してほしい”と思います。勉強と部活等に忙しい高校生の日常を思えば無理からぬことかもしれませんが、心の風景を言葉に託して固有の詩的世界を築くことにも、もっと努めてほしいと要求したい。

それから、これも今回だけではありませんが、書く文字が小さい。全体的に小さい字が目立ちます。ペンシルを使う人が多いからかもしれませんが、かつて書道で「大空」等と肉太く書いたように、ペンシルであっても大きく書くことにも気を遣ってほしい。大きく書けば、心もおのずと伸びやかになるうかと思うからです。(塚本)

今年も選者の票は割れた。レベルが上がると共に、作品に多様性が見られ、内容が濃くなったためだろう。これまでは多く見られた「学校行事」「部活」「登下校」「友」などの学校生活を対象にした作品の割合が小さくなった。社会詠(最優秀作品)も少しずつ増えてきたし、ユーモアのある作品(優秀賞2の「青春は尊いなんて」や入選1の「受験生踏んでも蹴っても」努力賞1の「生まれたようちの末っ子」など)も目立つようになった。特に相聞歌(恋の歌)が、これまで単に「好きだけと言えない」「遠くから君を見る」という気持ちだけを詠んだものから、表現に工夫した作品(優秀賞1の「方程式」、入選3の「離れても」努力賞3の「あの場所で」など)が見られるようになったのは喜ばしい。(橋元)

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「空と感情」

人は喜びという感情がある

空にも感情がある

空は喜び晴れる

人は悲しみという感情がある

空にも感情がある

空は悲しみ曇る

人は怒りという感情がある

空にも感情がある

空は怒り雨が降る

空は人ととても似ている

北稜1年 松本 亜美

【評】「空と感情」の涯^{はて}しないイメージを、人の日常にそのまま連れて来る作者の感性に詩の素晴しさがあります。三連三行プラス一行の〈空は人ととても似ている〉は、むしろ声の低い自由詩が大空に架けた最高の虹です。

▽優秀賞

「秋」

季節の風を感じると
気持ち
変わる

昨日の自分
と今日の自分

尚綱3年 山田 亜実

【評】全七行のとても短い詩の中に秋風が吹いてきます。二連目の二行からは、夏と秋のそれぞれにちがう〈自分〉が読む者にも見えてきます。美しく凝縮された素晴らしい詩です。

「現在の話」

左を見れば金色の空があつた
右を見れば藍色の空があつた
後ろを見ればどちらに行きたい、と問われた

金色の空の方を向いた
旭光の中で私は答えた こちらには行けない、と
もう過ぎてしまったことだから、もう生まれてしまったのだから

藍色の空の方を向いた
暗闇を背に私は答えた こちらには行きたくない、と
いずれ経験するはずだから、まだ死にたいとは思わないから

何も無い上を向いた
ここにいたい、と私は呟いた
あの日願ったこととは違うかもしれないけれど
いつか苦々しく思い出すのかもしれないけれど

積み重ねた過去を抱えて、まだ見ぬ未来を描いて
そうして私は進むのだから

現在は過去の夢であり いずれ未来の記憶となる
現在とはいっただって いつかのための足場なのだから

濟々鬢1年 荒木 よしの

【評】方角も、上下も、時間も、周囲の全ての定位置を消して上・下にも左・右にも、非常識の美学を貫いている作者がいます。やさしく、静かな詩の声で。

「檸檬」

私が飼っているインコは「檸檬」。全身真っ黄。小さな体。小さくとも、檸檬は部屋を明るく照らす。

朝が来た。窓から太陽の光が差し込む。鳥籠はその先の道のちようど先つちよ。鳥籠の中で照らされた檸檬。まるで太陽からこぼれ落ちた滴のように美しく輝いている。

檸檬が太陽の滴なら――。檸檬は天からの贈り物。檸檬は私の大切な家族。

今日も檸檬は幸せを歌う。そんな小さな命に感謝。いつも癒しを有難う。

尚綱3年 園田 鈴夏

【評】美しいとしか言い様のない詩の声です。全く過不足のない、言葉の輝きに脱帽です。
〈感謝と有難う〉をこめて。

「おふとん」

極楽 天国

そいつは私をつつみこむ

幼いころは

そいつを濡らして

朝目覚め

仲違い 家族げんか

そいつにぐちを

ぶちまけた

受験のつらく悲しい日々は

あふれる涙を

うけとめてくれた

晴れの日

そいつはフカフカで

太陽のにおいで

つつみこんでくれる

今までもこれからも

私をささえ続ける

おふとん

人吉2年 黒木 鳳弥

【評】〈おふとん〉に「お」をつけた詩作者は〈そいつ〉とも、記憶の指を伸ばします。〈今

までもこれからも」と歲月の長い幸福な日本の〈おふとん〉です。

「揺れる春」

一人きりの小さな窓辺に
うすいうすい花びらみたいな月
すこし濁った夕空に
うすいうすい花びらみたいな月
見えもしない地平線から昇ってきた

十七歳のわたしたちは
飴玉のような言葉を放りあう
ぼこりぼこりと落ちゆく言葉
一体いくつが届いているの

これからを生きるわたしたちは
正しいものや必要なものを
きちんと掬い上げていけるの

強すぎる自意識と
ひ弱な信念の狭間
すみれ草としてくらくら揺れる
わたし、たち

ああ
目を閉じて、目を閉じて。
ぐちゃぐちゃから離れてみる
すうっと息を吐き出して
この手で開いた窓からは
春の匂いが流れ込む

隣の家に灯ったあかり
向かいの路地に子どもたちの声
春の匂いがわたしを包む

熊本3年 菊川 和奏

【評】気持が先行して、やや書きすぎの箇所があります。急がず、しばらく寝かせておいて時間をおいてから、推敲は、他人の詩を読むような気持ちで。ぜひ。

▽入選

「写真」

動いていないのに
たった一部の瞬間なのに
不思議なことに

その一枚が広がって動いて
物語がみえる
あたりまえの生活も幸せにみえる
何げない風景も美しくみえる
たった一枚のもので
私は幸せになる
白黒の世界にぼつんと立つ兄弟
焼け野原を歩く親子
一生懸命働く子ども
私の知らない世界が広がっていて
たった一枚のもので
私は悲しくなる
まだ若い父と母
友達と遊んでいる幼い私
ランドセルを背負った私
学校行事ではしゃいでいる私
その一枚でいろんな感情を思い出し
私はなつかしくなる
私は写真が好きだ
私の知らない世界がみえる
私はいろんな気持ちになって
私の世界が広がる気がする

「画材屋さん」

新しい画材をかうと
新しい絵がかける
新しい絵をかくと
新しい自分と会える

第二1年

松本 奈々

「祖父の夏」

夏の朝
今日も畑で祖父ひとり
野菜作りにひと汗流す
祖父の野菜はいい匂い
祖父は本日九十歳
おめでとう ありがとう
長生きしてね
おじいちゃん

尚綱3年

上村 朝美

人吉2年

井手 心優

「青春はこれから」

僕は学校が好きだ。でも昔からじゃない。寧ろ嫌いで、いつもぼーっとすごす。何が楽しくて、みんな学校に行くんだろう。

僕は学校が好きだ。でも昔からじゃない。勉強も嫌いで、いつも長い休みがあげると居残り。自分が悪いとわかっていても、やる気がでない。

僕は学校が好きだ。でも昔からじゃない。人との関わりも面倒臭くて、いつも教室のつくえでねる。人から馬鹿にされるのもいやだったから、いつもしゃべらなかつた。ちよつと体型が大きいからってからかわなくても。

でも湧定に来て嫌いだった事、いやだった事がなくなった。

今は本当に学校が大好きだ。

仕事終わりの息抜きの場にもなった。

先生がやさしくて、友だちもみんなやさしい。

こんな学校が楽しいと思つたのは初めて。

僕はこの学校にいられた事がしあわせ。

最後の一年にいろんな事、

自分のやりたい事、

悔いのないよう思い出を作つていこうときめた。

湧心館定時制4年

村上 綾誠

「青春」

毎日自転車で川沿いを走る。

すがすがしき。

ここを通っていると、

なぜか青春という言葉を思い出す。

高校最後の夏は平成最後の夏。

私は青春を味わえたようなのだ。

尚綱3年

島崎 李音

▽努力賞

「一日」

小鳥の歌で目を覚ます

ググっと一回伸びをして、

いつものように街に出る

何時も早起きな黒い鳥
いつものように、生きるため
残飯探して回ってる

丁度騒がしい時間帯
速い鉄の塊や、人間たちが
しゃべる音
ボクはそれを聞き流し
塀にぴよんと飛び乗った

「明るい」と「暗い」の間の時間
空は不思議な色をしている
もう少し空を見たいけど
そろそろ帰る時間かな

大きなドアの前に来て
いつも通りに「ただいま」を言う
キミが笑顔でドアを開け、
「××お帰り」と声を掛ける

僕はいつものように首元の
鈴をチリンと鳴らしながら
すました顔で家に入る

濟々鬘1年

古賀 綾花

「私の猫」

汚れた私の猫を抱く
腕いっぱい広がる温かさ
鼻におうは土のかおり
肉球には少しの水気
陽の下で寝ころがり
動くものを追いかける
実に自由だ

と、

羨ましがるのは、
電気の下で、ノートに向かう私。

尚綱3年

泉 美帆

「声」

「ただいま」の声が
久々に出たお盆休み
「おかえり」の声が
とても温かく感じた
「いただきます」の声が
複数重なった夕食
「おいしいね」の声が
笑い声になった
「気をつけてね」の声が
さびしく聞こえた最終日
「またね」の声が
少しだけ震えてしまった
次はいつ帰れるのだろう
私の大好きな家族のもとへ

第二1年 津崎 桃香

「背中合わせの私と私」

過去の自分は今の自分に何と言うだろう
今の自分は過去の自分に何と言いたい？
言葉一つもかけてくれない未来の自分は
一体何をしている？

同じ人間なのに
そんなに変わらないはずなのに
まるで別人のような自分に問いかける

「ねえ、君はどうしたい？」

尚綱2年 米村 まいな

「人間」

この世には意味のない差別がある
性別や宗教の違いからうまれるものもあれば
その人自身が犯した行為でうまれることもある
「私はこうじゃない」
「私はそんなことしない」
本当にそうだろうか
元はみな人間なのだ
犯罪を犯すのも
いじめをするのも
戦争を起こすのも 全て人間
被害者になるのも

難民になってしまうのも 人間
みんなみんな同じ人間なのだ
これ以上恐ろしいことがあるだろうか

盲学校2年 藤岡 まい

【総評】早くも公徳文芸賞の審査の季節がめぐって来ました。なんと、15年目の秋、です。現代の詩の審査員をしてまいりましたが、高校生の詩人たちとの一年、一年は喜びの歳月でした。参加の詩人も男子、女子ともに多くなりました。若い、にわか詩人たちも、公徳会へと、素直な感性を運んでくださいました。形式が変わろうと変わるまいと、良い詩と上手な詩はちがいます。上手に書こうとか全く思わない今のままの熊本の高校生を、15年間の現代詩の空の美しい雲のように思っております。(丸山)

【肥後狂句部門】

▽最優秀賞

そだね〜 熊本弁が消えてゆく

高森1年 工藤 菜々

【評】全国的に方言がすたれつつある。熊本弁も例外ではない。お年寄りの使う方言が分からないという若者たち。言葉は文化だ。方言がなくなれば、そこから発生した文化も衰退していく。そんな事態を憂えている句だ。

▽優秀賞

まっしぐら 恋も部活も勉強も

城北1年 石原 三夢

【評】勉強も部活も、そして恋愛もまっしぐらに進むのが若者の特権だ。失敗を恐れないで行こう。

クラス仲間 友の笑顔は日本一

城北1年 仲光 夏奈

【評】クラスの友達は若い時の財産。苦しい時、つらい時も友達の笑顔に救われる。

まっしぐら 制服走る八時前

球磨工業1年 中竹 菜摘

【評】遅刻すまいと制服は校門へ向け全力疾走という場面。情景が目に見えるようだ。

そだね〜 うなづく友の温かさ

第二1年 松本 清花

【評】自分の意見に友達が同調してくれた時は百万の味方を得た気持ちだろう。

クラス仲間 過ごした日々が宝物

尚綱2年 岡田 ひなた

【評】友達は宝物という句がいくつかあったが、この句を採用した。「過ごした日々」に友情を育てた努力の跡を感じる。

▽入選

そだね〜 水分補給忘れずに

球磨工業1年 杉下 紘生

そだね〜 地球の平和続けたい

多良木3年 久保田 健史

まっしぐら みんなの思い被災地へ

熊本学園大学付属2年 六田 飛鳥

まっしぐら 勉強よりも好きなもの

熊本信愛女学院3年 平嶋 遥歌

クラス仲間 みんながいればがんばれる

城北3年 中尾 千愛

▽努力賞

クラス仲間 猛暑に負けずみな熱い

第二1年 樋口 大誠

そだね〜 どこ見ても山多良木町

多良木3年 加原 沙恵

そだね〜 物事決める合言葉

高森2年 尾崎 埜亜

そだね〜 眠たい寝ようこの授業

湧心館定時制1年 今 翔太

まっしぐら 成績表の右下がり

文徳1年 梶川 龍馬

まっしぐら 課外終わりの夕ごはん

第一3年 元田 紀代香

まっしぐら 涼しか部屋に走り込む

盲学校2年 隅田 未来

まっしぐら 君の心にストライク

球磨工業2年 谷 和輝

まっしぐら それが若さの特権ぞ

九州学院2年 吉永 菜々子

まっしぐら 癒やし求めて農業へ

芦北2年 前田 賢吾

【総評】肥後狂句は、肥後もつこすに代表される熊本の精神風土と、熊本弁が融合して生まれた短文芸です。ユーモア、世相風刺、人情の機微を詠むのが特徴です。作り方は笠(題)に十二音で付け句します。七五調が基本です。十二音という制約の中で作るの難しいことですが、だからこそどう表現するか工夫するのも楽しみであります。そういうことで字余りは厳しく律しています。

今回の応募は千三百九十二句。昨年より千句近く減りました。字余りの句が多数見られた反面、若者らしいはつらつとした句、情景や人の心情を鋭く観察した句も多くありました。ベテラン作家の句とはまたひと味違う感動がありました。またいつか肥後狂句に戻ってきてほしいと思います。

最優秀賞には、消えゆく方言を憂えた句を採りました、方言の衰退は、方言から生まれた地方文化の衰退も意味します。方言の良さを見直したいものです。(野方)